
雨色奇譚

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨色奇譚

【Nコード】

N00851

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

梅雨に時期に書いた、蘭と赤井の話です。とある事情で困っていた蘭に、赤井が手を差し出す。まったくシリアス。新蘭・秀明前提の赤井十蘭（notカップリング）

プロローグ

なんでこんなことになったんだろ。

今日は休日だが部活があり、夕方頃に終わった。

そしてその後は母の誕生日プレゼントのため、ストールを買いに銀座まで来ていたのだが。

蘭は首をかしげながら、目の前の等身大鏡を見つめた。

その中に映る自分はいつもの制服ではなく、二十代のファッション雑誌のモデルが着てそうな、上質の白いハイウエストのワンピースを着ている。

試着室の中できると回ると、ワンピースの裾も控えめに揺らいだ。

「考えても、仕方ないか」

それに、この外で待っている人がある。
意を決して、蘭はカーテンを開けた。

今日も空振りか。

赤井は心の中でため息をつき、小雨の降りしきる空を傘の合間から見上げた。

数日前この辺りで組織の数名が落ち合ったという情報を聞きつけ、そこかしこをうろついていたのだが、何の手がかりも見つからなかった。

休日の観光客も混じった雑踏、そして視界をさえぎる小雨、と条件は揃っていただけに、成果が上げられなかったことが惜しかった。組織の奴らも恐らくFBIを警戒して、落ち合う場所を頻繁に変えているのだろう。

今度からは奴らが出会った場所に行くのではなく、出会ったことの無い場所で見張っていたほうがいいかもしれない。

そんなことを考えながら、赤井は小さなブティックショップの屋根の下に入った。

傘をたたみ、ジャケットから煙草を取り出す。

今日の任務は終わった。

そう判断すると一服したくなったのだ。

同僚の金髪の妙齡美女が「肺が真っ黒になるわよ」と眉間を寄せて以前言っていたのを思い出したが、気にせず火をつける。

一日1箱使ってしまうほど吸うようになったのは、二年前からである。

それまでは二、三本しか吸わなかった。

ヘビースモーカーになった原因は赤井自身もわかっている。

煙を吐き出し、彼は屋根から滴り落ちる水滴を見つめた。

線香花火のように水滴は徐々にその形を膨らませ、耐えきれなくなったところで、ふっと地面に落ち弾いて消える。

この一滴の水の如く、「彼女」は一瞬でこの世から消えてしまった。

数か月前起こったそれは、未だに自分の頭の中でちらついては消え、ちらついては消えを繰り返す。

まるでこのタバコの灰煙のような、あいまいさ。

それをかき消すかのように、雨樋に向けて煙を吐き出した。

つと、その瞬間、煙の向こうのある姿が目に入った。

道路を挟んだ反対側の、同じくショップが立ち並ぶ通りの屋根で立ちすくむ、女子高生が。

思わず赤井は彼女を凝視する。

ただの買い物かと思いきや、黄色い傘を左手に、スポーツタオルを右手に持つ、彼女の服を見て片眉を上げた。

薄汚れた茶色のシミがスカートから足元の白いハイソックスまでべっとりといでいたのだ。

彼女はタオルをスカートに当てて、ぽんぽんとたたく。

タオルにはすでに、同じ茶色の汚れがしみ込んでいる。

何度もそうする行動に、彼女はあのシミをどうにかして取りたいのだと赤井は気付いた。

しかしシミは右側全体に大きくついており、中々取れそうにない。華やかな街の片隅で、小さくなって必死に汚れを取ろうとする姿は、周りから浮いて見えた。

こんなところで頑張らずとも、傘を持っているなら家に帰ってから洗濯すればいいものを。

そう思ったが、次に、ここに用があるから帰れないのではないか。そしてその用は服が汚れたままでは出来ないのではないか、と考えを改めた。

その間も、ずっと彼女はスカートにタオルを当て続けている。

遠目にだが、彼女の顔が泣きそうな表情をしていることがわかり、赤井は舌打ちをした。

そして煙草を携帯灰皿の中で押しつぶした。

「何をやっているんだあの女は……」

余計で非効率なことだと重々承知しつつ、赤井は屋根から身を出した。

二

こめかみあたりからじわりと汗がにじみ出た。

蘭は静かな雨の降る銀座の中で、一人ぼつんと取り残されたような感覚を覚える。

こすると余計に染み付くので、部活で使うタオルで叩いているのだが、汚れは思った以上にしつこく、スカートに茶色がへばり続いていた。

あきらめて、このままの状態でお店に入ろうかとも思う。

しかし入ってからの周りの視線を想像すると、いたたまれなくて一歩が踏み出せない。

雁字搦めの状態で、思わず染みるような熱いものが目尻に押し寄せてくる。

こんなところで泣けばもっと恥ずかしい。

ぐっとこらえてタオルで目をこすった。

最近、悲しいことがあると、ふっと脳裏に「彼」がよぎることが多くなった。

あのどこをほつつき歩いているのかわからない、幼馴染の彼が。

自分は彼に助けを求めているのだろうか。

それとも、悲しいことが彼を連想させるのだろうか。

もしも後者なら、それはもっと悲しいことだ。

——もうやめよう、そんなこと考えてもあいつは来ないんだから

何かに耐えるように、ぎゅっと目をつむった。

そして次に目を開けると、さっきまで無かった男物の革靴が見えた。

通り過ぎようとしているのではなく、完全に自分のほうを向いている。

はっとして蘭は顔を上げた。

「……あなたは」

「何をしている」

「え？」

ニット帽を被った男が少し不機嫌そうな顔で、彼女に問う。

奇縁。

その言葉がまさしく当てはまる二人の間に、一瞬の無が訪れる。

思いもかけない人物を目にして返事を忘れた蘭を見て、もう一度赤井は聞いた。

「何をしていると聞いているんだ」

それで蘭は我に返った。

「えっ、あ、スカートが汚れてしまっ取ろうとしているんですけど取れないんです」

「それは見ればわかる。どうしてそんなことになったんだ」

「え…えっと、ここに学校帰りに来た時に、おばあさんが重い荷物でよろめいているのが見えたんです。こけそうだったから、思わず後ろから支えたら、そのままおばあさんが私の方向に傾いてきて…」

尻餅をついてしまったんです、と段々小声になって答えた。

彼女が下敷きになったので老婆には怪我は無かった。

しかし、小雨の中の出来事だったので、蘭のスカートや足には泥の混じった水がついてしまったのだ。

幸いにも、目が悪い老婆がその汚れに気付くことはなく。

悟られぬよう蘭は彼女をバス停まで送り、現在に至るのである。

蘭はそこまで詳しくは伝えなかったが、赤井は聡明な頭でその経緯が安易に想像できたようだ。

呆れた風のため息をつく。

「で、何故帰らない。この辺に何か用でもあるのか」

顔見知り程度で挨拶も無しにぽんぽんと聞かれるが、蘭は何故か違和感を覚えず素直に言う。

「お母さんの誕生日プレゼントを買いに来たんです。部活が忙しくて今日しか行く日が無かったんですけど、こんな汚れたカッコじゃデパートに入っても目立つただけでお店の人も迷惑だろうし、ここにいたんです」

困ってます、とは言わなかった。

状況からして困っているのは丸わかりだろうが、言葉にする気にはならなくて、蘭は背筋をぴんと伸ばした。

いつも突然現れる男。

そしてその度に涙を浮かべている自分。

それが情けなくて、どうしようもなく悔しかった。

何も言わなくても、全てを見透かされているような気がした。

そんな彼女の腕を、彼は一年前と同じく少し強めに引っ張った。

蘭は彼の手の熱さに驚く。

「えっ？」

「来い。服が必要なんだろう。向かい側の店に行く」

「必要ですけど、お金はプレゼントに使うから買えません」

「俺のエゴだ。気にするな」

「……！ ちょっと、そっちのほうがもっとダメです」

彼の考えがわかり、蘭はずるずる引っ張られながらもきつめに断る。

傘を差していないので、屋根から出た途端髪の毛に水滴が下りてきた。

「私はただ数回会っただけの人間ですよ？ 何でそこまでしてくれようとするんですか」

「数回会っただけの人間でも、長年の知り合いの人間でも、目の前でそんな格好されて素通りしたら目覚めが悪くなる」

「でも」

「――顔見知りでもない他人のために自分を汚すお前に、文句を言われる筋はないな」

「……」

ほめているのか貶されているのかわからない理屈だったが、蘭が二の句が継げなくなるには十分の言葉だった。

蘭の、手を振り払おうとする力が弱まる。

丁度信号が青になったので、そのまま二人は横断歩道を渡っていく。

先ほどまで赤井が一服していた、屋根のあるショップに繋がる歩道だ。

腕を掴む力はまだ強く、だがそこから伝わる熱さは雨で冷え切った自分の体を癒すように蘭は感じた。

警戒心が弱まり、思わずつぶやいた。

「……今日は言わないんですね」

「何をだ」

「また泣いているのかって」

赤井は彼女をちらりと見てから、すぐに視線を戻す。

「飽きた。――それに、前も言ったが泣くことは悪いことではない」

蘭は意外な返事に目を丸くする。

「ついさっきまで孤独だった世界の中で、彼女は一人ではなく二人になった。」

三

ショップに入ると、赤井は笑顔でやってきた若い女性店員に「ここに適当に服を見繕ってやってくれ」とぶっきらぼうに言う。

若い割に慣れているのか、店員は彼の剣呑な雰囲気気押されず、にっこり頷いて蘭を軽く観察する。

そして汚れた制服を見て状況を把握したのか、手早く服を探し始めた。

根掘り葉掘り聞くような、めんどろな店員ではなくて助かった。

内心そう思いながら、赤井は店内の隅に移動する。

することがないので、何気なくあたりを見渡すと、この店にある服の雰囲気「彼女」が生前着ていたものとよく似ていることに気づいた。

華やかすぎず、程よいシックさを演出した服を、彼女は好んで選んでいた。

自分との待ち合わせ場所に、はにかみながらそんな服を着てやって来た。

その事実には戸惑いも感慨もなく、彼はただ自分が思った以上に「重症」なのだと認識した。

だからといって、何がどうなるわけでもない。

赤井は淡々と現実を受け止める。

ふとタバコが吸いたくなり、胸のポケットをまさぐった。

が、今いる場所を思い出し、仕方なく手を止めた。

服を売る場所で喫煙はNGだ。

そうこうしているうちに、店員が一着の服を手に取り、蘭を試着室へと案内する。

彼女は赤井のほうをちらりと見たが、彼は顎で「早く行け」と伝えた。

店員に背中を押され、蘭はおずおずと試着室に入って行った。

「これからお買い物ですか？」

試着室のカーテンを閉めた店員が、振り向いてやや小声で赤井に聞く。

好奇心から出た問いではないとわかったので、素直に答える。

「この辺のデパートに行くそうだ」

「そうなんですか。それは楽しみです」

次に店員は大きな紙袋をレジから取り出し、袋の口をがばっと開けた。

蘭から預かった学生鞆と柔道着が中に入るのか大きさを確認する。デパートに行くのに、新しく買う服と学生鞆はミスマッチだと思っただけ。

こういった無言の心づかいは日本独特だなと赤井が感じていると、試着室のカーテンが開かれた。

お疲れ様です、と店員が言いながら蘭に近づく。

赤井も彼女を一瞥した。

服を着たと同時に開き直ったのか、蘭はまっすぐ背筋を伸ばした状態で、彼のほうに視線を送る。

店員が見繕った服はハイウエストの白のワンピースで、こういったことに関心がほぼない赤井でも、比較的背の高い蘭によく似あうと思った。

「すごくお似合いですよ。お客様、スタイルがいいのでフォーマルがとってもきれいですね」

店員の言葉はお世辞でも何でもなく事実だった。

蘭は慣れない服と心からのほめ言葉に頬を赤らめたが、ありがと

うございます、とお礼を言って試着室から出ようとする。

靴を履こうと彼女が下を見れば、いつの間にかオパールグリーン
のパンプスまで置いてある。

「ついでに履いておけ」

赤井がそういえば、蘭も頷いて素直に白いエナメルのパンプスに
足を通した。

その間に赤井はさりげない仕草で店員に黒いクレジットカードを
渡す。

店員は無言でお辞儀をしてそれを受け取り、支払いを済ませた。
返されたカードを革の財布に入れ、彼はさっさと外に出ようとする。
る。

それをあわてて蘭が呼びとめる。

「ちょ、ちょっと待ってください。そのままどこかに行かないでく
ださいね！」

赤井は彼女に服を買ってやるために店に入った。

その目的が達成された今、長居する必要はない。

蘭と行動を一緒にする必要もない。

そういう意図を彼女はわかっていたのだ。

呼び止められて、赤井は出口で思わず立ち止まってしまう。

急ぐ蘭に、店員は鞆と柔道着の入った紙袋を差し出す。

手渡した時、店員は「素敵なお客さんですね」とにこやかに言っ
た。

蘭はその言葉に訂正する間もなかったので、あいまいな笑顔を浮
かべてお礼を言い、赤井のもとに走り寄った。

外はまだ小雨が降っていて、湿った空気が二人の頬をなでる。

用は済んだ、と赤井が言おうとすると先に蘭が声を発した。

「あ、あの！」

「…なんだ」

「服、ありがとうございます。これからまだお時間ありますか。やっばりお礼をさせてください」

「お金の余裕は無かったんじゃないのか」

少し意地悪に言えば、蘭は鞆を弄って二枚の券を取り出した。

「私が行こうとしているデパートの、最上階の喫茶店のチケットです。最近できたばかりで、父の顧客がくれたんです。よろしければ一緒に行ってくださいませんか」

赤井が反論しないようするためか、息継ぎなく一気に伝える。

二枚の券を差し出し、こちらを見つめる蘭の表情は必死だ。

赤井は無言で暫くそんな彼女を見た。

しなやかな強さを秘めた、二つの瞳。

子供特有の、純粹で何かを訴える力を持ったそれ。

心の奥底で、何かがざわつく感じがする。

先ほどダブらせた「彼女」と目の前の少女は、やはり違う。

それが却って赤井の心をゆるがせた。

——たまには成行きに任せるか。

「……おい」

「はい？」

「俺が暇人に見えるか？」

普通、裏を返せばそんなに自分は暇じゃないということになるが、今回はそのままの意味だ。

彼女も察して、少し考える仕草を見せる。
そしておぼろげに、だが正直に答えた。

「今は、暇そうに見えました」

あまりにも素直な返事に、赤井は右口角を上げる。

「お前がそう見えたなら付き合ってやろう」

今日は妙な日だ。

しかしそれが不快には感じず、彼は安堵の表情を浮かべた蘭からチケットを一枚受け取った。

四

「大体の目星はついているのか」

「え？」

「買うやつだ」

百貨店に入ると、赤井は突然聞いてきた。

母親の誕生日プレゼントのことを指しているのだと、少しの間を置いてからわかって、蘭は頷く。

「はい。一度下見に来ていたので」

「なら先に済ませてこい。最初の目的は最初の内に済ませておくものだ」

確かにプレゼントを買うために、服までもらってここまで来た。

しかし、そこまでしてもらった相手を待たせるのはさすがにためらいがあり、「でも」と言う。

彼は付け足す。

「その服は何のための服だ？」

してもらったからこそ、行くべきだ。

彼の言葉の行間に気付き、蘭ははっとした。

深々とお辞儀をする。

「ありがとうございます。じゃあ一階のフロアにあるんで、行きます。えっと……」

「俺はあそこの椅子で待っている。行って来い」

その言葉に、蘭はなぜ胸が痛くなった。
理由がわからず戸惑ったが、それを無視して足早に婦人服飾の売り場に向かった。

いらっしやいませ、という先ほどのショップよりも幾分年を重ねた声を受けながら、彼女はあたりをぐるりと見回した。

下見した時と同じところに、お目当てのストールを見つけて、内心安堵する。

麻の白地の中に、白い刺繍で花の模様が入った優しげなものだ。
以前ここにきて、これを見た時「これだ」と思ったのだ。

母は、見た目ほど「キツク」はない。

強さと繊細さと優しさを兼ね備えた、しなやかな人だ。

そのイメージとこのストールがぴったり一致した。

値段としては、鈴木財閥のお嬢様ならいざ知らず、普通の高校生であれば1, 2カ月遊ぶお金は無くなりそうなくらいのものだった。
紙袋に入った学生鞆の中をこっそりのぞく。

そこには、茶封筒がしのばされている。

今朝家を出る前に、蘭は寄り道するとか小五郎に言わなかった。
なのに彼が、不自然なタイミングでむき出しの万札を渡してきたのだ。

「馬券で当てたからたまにはやる」との言葉を添えて。

どこで母親のプレゼントを買うことを聞きつけたかは知らないが、その金額ではなく行為に蘭はうれしさがこみ上げた。

いろいろ言いたいことはあったが、そこで言うとは照れて結局お金を仕舞われそうだったので、素直に札を伝えて受け取っていた。

その万札と自分が口座から下ろしたお金を茶封筒に包み、この場を持ってきている。

ストールを手に取り、レジに向かう。

プレゼント用に包んでもらい、お金を渡し、すぐに売り場を出た。
慣れないパンプスでつまずきかけながら、急いで彼と別れた場所

まで走る。

少しだけの距離なのに、ふと、何ともいえぬ胸苦しさを覚えた。さっき感じた痛みと同じもの。

それはつまり、走ったことによる苦しさではない。

この感覚、前にもあった。

デジャビュが蘭を襲う。

最近の様な、遠い遠い昔の様な。

しかしそれを認識する前に、椅子に座って備え付けの新聞を読む赤井を見つけた。

「あ……」

「終わったのか」

「あ、はい。お待たせしてすみませんでした」

どんなものを買ったとか、余計なことは一切聞かない。

赤井は「行くか」とだけ言い、踵を返した。

蘭はその背中を見て、胸苦しきの正体について考えていた。

五

百貨店、というより英国の片田舎の喫茶店のようだなと感じる。むしろそういうものをイメージしているのかもしれない。

レトロなエプロンをつけたウェイトレスから珈琲をもらい、赤井は蘭と窓際の席で飲む。

窓から見える空はすっかり夜で、見下ろす下界には、ネオンがそこかしこにまばゆく光り輝いている。

一閃、カラスが窓の外で飛び去ったような気がして、はっとした。

「どうかしましたか？」

カフェモカを飲む少女が、不思議そうに問う。

なんでもない、とかわし赤井はブラックコーヒーに口をつけた。

このご時世に百貨店の最上階に喫茶店を開くくらいだ。

かなりこだわって作っているのだろうと思わせる味だった。

悪くは無い。

「それにしても、ホント高いですね。夜景がすごく綺麗。マンハッタンで見た夜景もすごく素敵だったけど」

赤井と同じ方向を眺めて彼女が言う。

そういえば、目の前の少女と初めて出会ったのもニューヨークだった。

おそらくあの時に見たのだろう。

赤井は黙ってそんなことを考える。

「……四回目」

「会った回数か」

「はい」

思考がシンクロした彼女はうなずく。

「最初はニューヨーク、次は東京の料亭ですれ違い、三回目は電話ボックス。そして四回目が今。正直、不思議です。こうやってあなただとここにいるのが」

誘ったのは私なんですけどね、と照れたように付け足して蘭は笑った。

今日のはじめてみる笑顔だと赤井は思う。

しかし、満面の笑みではない。

控えめで、何かを押し殺した笑顔。

目の前も少女も、「彼女」と同様に哀しみを持って生きているのだろう。

人間を十種類くらいに分ければ、きっと少女と「彼女」は同族だ。だが、二十種類にまで分ければ、違ってくる。

似ているようで、心奥底の深層は違う。

赤井は任務の関係で、少女の事情を知っている。

幼馴染の少年をずっと待ち続けている、少女の切情を。

だからこそ、そう感じた。

「以前は当たり前のように会ってた人とは会わなくなって、かと思えば予想だになかった人には何度も会う。ほんと不思議」

窓に反射した己を見つめながら、独り言のように少女がつぶやく。どこか疲れた声だったので、赤井は少し驚いた。

その若さでそんな色の声を出すのかと。

彼女の背負うものを思い返し、無意識に自分の持つ「何か」をだぶらせる。

「……人は、失ってからその大切さに気づく」
「え？」

普段なら言うこともない、心の内が外に出た。

「だが、気づいた後なら、大切にできる。一つ一つの縁も、以前より大事にできる。それで取り返しがつくのなら……それに越したことは無い」

赤井の謎めいた言葉に、少女は一瞬虚を突かれたように目を開いた。

そして、震える睫毛をゆっくりと伏せる。

赤井は言ってから自分の言葉に意外さを覚えてしまう。

そして少女が見せた動揺に、内情に入りすぎたかと後悔した。
しかし、少女は次にもう一度ゆっくりと目を前に戻し、壊れそうな笑みを見せた。

「そう、ですね。きっと、取り返しつきますよね」

自分に言い聞かせるかのように、二度うなずく。

「ありがとうございます。私、もう少し待てそうな気がします」

彼女は無意識に、赤井が「知っている」ことを前提で言葉を紡ぐ。

「さつき、プレゼントを買って戻って来る時不安な気持ちになったんです。あいつがどこかに行ってしまった時と同じ気持ち。でも、あなたを見つけてとても安心しました。それは何でだろうってずっと考えてたんですけど、わかりました」

先ほどの疲れた声を露ほど感じさせない、静かだが強い意志が目
に灯ったのに赤井は気づいた。

「あなたが、待っていてくれたから。――だから、私も待ちます」
「……そうか」

それから暫く、二人で黙って珈琲を飲んだ。
不自然ではない沈黙だった。

いつもの赤井なら、気づかれないよう人物を観察してその人と成
りを推理するのだが、今回はしなかった。

小難しいことばかり考える頭を休ませ、単に、珈琲を味わった。
赤井と蘭を纏う、独特の雰囲気飲まれて、通り過ぎるウェイト
レスや他の客が度々二人を振りかえっていた。

誰一人として寄せ付けないような、それでいて強烈な何かを黙し
て発する男と、反対に全てのものを惹き寄せてしまう魅力が無自覚
で持つ少女。

アンバランスな二人が生み出す光景は、他の人間にとって鮮烈だ
った。

そんな光景から先に出たのは赤井。

十九時を告げるアナウンスがデパート内に響き渡った後、空にな
ったカップをゆっくり置いた。

「馳走になった」とだけ言って、立ち上がる。

いつかは必ず来る終わりだったので、今度は蘭も引き留めない。
その代わり「こちらこそありがとうございました」とお辞儀をし
た。

奇妙な出会いもここまでだ。

赤井は彼女に背を向け店を出ようとする。

「あ、あの」

その背中に蘭が呼びかける。
赤井は振り返らず足だけ止めた。
しかし。

「えっと、お、お気を付けて」

「お前もな」

おそらく少女は自分がFBIだということをNYの一件で知っている。

だからこそ出てきた言葉だろう。

それがわかっていた赤井は、素っ気なく返し、店を出た。

店の外は、百貨店の売り場だ。

英吉利の片田舎から突然大都会に戻ってきた不思議な感覚を覚えつつ、彼はポケットの中のタバコを弄った。

だが、ふとその手を止めポケットから抜いた。

なぜか、今日はもう煙草を吸う気にはなくなっていた。

いや、必要ないと思ったのだ。

五（後書き）

次のエピソードでラストです。

エピローグ

「また聞きそびれちゃったな……」

蘭は一人になった席でぼんやりと夜景を見つめた。

聞けなかったのは、彼の名前。

たびたび会っているのに、しかも今回は服までもらって、なのに名前知らない謎の男。

わかっているのは、FBIの人間かもしれないということだけ。でも。

「また、会えそうな気がするし、いつか」

本当に奇妙な日だ。

蘭は一人でこっそり笑い、席を立った。

彼の座った正面をみれば、自分が渡したチケットがソーサーの下に挟んである。

これをくれた顧客の女性を思い出し、心の中でお礼を言う。

本当は親友の女の子とここに来るつもりだったが、今日使ったことに全く後悔はない。

彼が言った「一つの縁」を大事にできたのだから。

ならば彼も、自分との縁を大事にしてくれたのだろうか。

何かの取り返しが、つくように。

そこまで考えて、蘭はかぶりを振った。

あまり彼のことを深く考えるのはよそう。

危うい影を背に負う、優しい優しい人。

だから、彼が何も言わないなら自分も何も知らないほうがいい。感覚的に蘭はそう判断した。

紙袋の紐を肩にかけて、もう一度自分を映す窓を見る。

水滴がちらほらつくので、まだ外は降っているようだ。
今日の出来事を、アイツに言ったら驚くかな。
そんなことを考える自分が楽しかった。

少し遅めの帰宅をすると、飲みに行っている父は不在で、居候の少年が事務所のソファでゲームをしていた。

おかえり、と少年は言いかけたが、蘭の服装を見て目を丸くする。朝事務所で別れるまでは制服だったのに、帰ってこれば急にモデルのような綺麗な格好をしているのだから。

どうしたの、と聞かれて蘭は少しだけ考える。

そして、「あしながお兄さんからもらったの」と笑って答え、少年を驚かせていた。

エピローグ（後書き）

短い話でしたが、読んでくださりありがとうございました。

銀座とか書いておきながら、自分はそこに行ったことがないので、勝手に地元の京都の四条をイメージして街中書きました（爆）ついでに、デパートは京都駅の伊勢丹を…（笑）

リアル銀座からかけ離れてしまってすみません；

でも書いてる本人は「赤井が蘭に服を買ってあげる」ネタがやりたかったので、楽しかったです。

マイナーな組み合わせでしたが、少しでも受け入れていただければ幸いです。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0085i/>

雨色奇譚

2010年10月9日04時53分発行